

明治期の女学生が演じた『リア王』

—宮田脩『コルデリア姫』の泣かないコーデイーリア

本 多 まりえ

はじめに

日本でシェイクスピアが本格的に紹介されたのは、明治時代初期である。しかし、当時は作品を舞台で見るよりも、本や新聞・雑誌で翻訳や翻案を読む方が主流であった。というのも、この時代にはまだ上演用の翻訳がなく、シェイクスピア劇を演出できる監督も、演じられる役者もいなかったからだ。明治期にはいくつか舞台上演はあったが、日本を舞台とする翻案作品が多かった。明治末期になってようやくシェイクスピアの原作に基づく翻訳劇が上演されるようになり、その最初のものが、一九一一年（明治四四）年に帝国劇場で上演された文芸協会の『ハムレット』で、協会責任者の坪内逍遙が翻訳と演出を行った。

明治時代のシェイクスピアの読者層は不明だが、女性がかな

りの数いたようだ。例えば、三宅花圃の女学生小説『藪の鶯』（一八八八（明治二一）年）の中で、跡見塾の女学生が「あのセクスピアが顔の皮の厚い女は。男の女らしいのと同じことで。好ましくないものだと申しましたし」（五四）と述べる。また、浅野馮虚訳『ベニスの商人』（一九〇六（明治三九）年）の序で、「小説愛読者」の女性が「訳者」に「翻訳ものというのと、大抵皆ゴツゴツして、読み難くくて、面白くなくて、睡気がさして、肩が張りますから、折角買つても、二三枚読むんで止めて仕舞いますわ。この脚本はスラスラ書いてあつて？」と尋ねる（川戸・榊原 一三四）。

この時代にシェイクスピアを読んでいた女性が少なからずいたことは、女性向けの新聞・雑誌からも窺える。川戸道昭編『明治のシェイクスピア』の目録によると、明治期の女性向け

の新聞・雑誌に掲載されたシェイクスピアの翻訳・翻案は二二点ある。ここには含められていないが、『女学雑誌』の『女子読本』第一章の「両親に対する務め」も、『リア王』の翻案である(宮下一〇)。これを含めると計一三点となり、この内最も数が多いのは『リア王』(四点)である。以下、『ハムレット』(三点)、『ジュリアス・シーザー』(一点)、『ロミオとジュリエット』(一点)、『マクベス』(一点)、『シンペリン』(一点)、『テンペスト』(一点)、『ヴェーナスとアドーニス』(一点)の順となる。

『リア王』が最多となった理由として、本作品が当時の女学校で英語学習の教材として広く使用されていたことが挙げられる。つまり、女学生読者にとって馴染みがあったのだ。また、逍遙によると、シェイクスピア劇は明治三〇年代以降、「諸処の学校で英語練習の一法として」演じられた(川戸・榎原二七〇)。このことは、本稿で取り上げる『コルデリア姫』にも当てはまりそうだ。本作品は一九〇四(明治三七)年三月発行の雑誌『女学世界』(正確には増刊号の『女学校生活』)に掲載された。正式な作品名は、『成女学校記念会余興 コルデリア姫(沙翁作「キング、リア」の一節)』である。作者の宮田素庵こと宮田脩は、執筆当時は「成女学校」(現・成女学園中学校、成女高等学校)の講師だった。宮田は東京専門学校(現・早稲田大学)を出た後、一九〇一(明治三四)年に成女学校の講師となり、一九〇八(明治四一)年に「成女高等女学校」への改称に伴い校長となり、亡くなるまで校長を務めた(神辺一二)。

宮田は『良妻賢母論』(一九一六(大正五)年)など女子教育論を多数書いており、男女平等や人格主義に基づくリベラルな教育を目指していた。実際、成女は生徒の自主や自治を育むことをモットーとしていたようだが、これについては第三節で詳しく述べることにする。また、英語教育にも力を入れていたことから、『リア王』が英語の授業で学習された可能性が高い。

『コルデリア姫』の序文には、本作品は一九〇三(明治三六)年一月に、「成女学校の記念会で催した余興対話の材料として」使用されたとあり、『リア王』の第一幕第一場のみを扱った翻案であった。小原國芳によると、明治時代、キリスト教の女学校や中学校では「対話」、「余興」、「劇」といった名で芝居上演が行われていたが、今日のような学芸会が公立の小学校で行われ、一般に広まったのは、大正時代になってからのことである(二七二)。しかし、「対話」、「余興」、「劇」は、実際には成女を含むキリスト教以外の女学校でも行われており、成女で『コルデリア姫』が上演された四か月後に、石川県立第一高等女学校で『リヤ王領地分配』という対話が演じられた(井上二九)。また、村岡花子をモデルとしたNHKのドラマ『花子とアン』の中に、明治末期の架空の女学校の行事で『リア王』が二年連続で上演されたという台詞があるが、村岡の母校の東洋英和女学校でも『リア王』が演じられたことがあったのかもしれない。

先に、逍遙がシェイクスピア劇の学校上演を「英語修練」と

関連づけていたことを指摘したが、宮田の場合は、「此作に現れたコルデリアの意気は、実に心ある婦人の心とすべき処と思いましたから、強いて邦文に移して見た次第であります」と言うように、「英語修練」ではなく、「心ある婦人」、換言すれば、分別のある女性になるための「精神修養」という目的があったようだ(五〇三)。それにしても、「コルデリアの意気」とは何であろうか。そもそも「意気」とはどういう意味か。『日本国語大辞典(第二版)』によれば、「意気」には三つの定義がある。即ち、「(一)心に溢れる元気。気合。気概。いきこみ」、「(二)気だて。心ばえ。気まえ。気性。気風」、「(三)意気地のあること。心意気」である。この中どの意味で用いられているかも、意気が何を示すかも、作品を読まないことには分からないが、宮田がコルデリアを、女学生にとって理想の女性として提示したことは確かだ。

コルデリアは、明治期の『リア王』の翻訳・翻案では通常、「孝女」として提示されたが、『コルデリア姫』では、父の圧力に屈せず自己の信念を貫く反骨精神の強い娘として描かれる。また本作品では、原作と異なり、宮廷を去る際にコルデリアは泣かないのである。このような興味深い特徴があるにも拘らず、本作品に特化した研究はこれまでなかった。土谷桃子は、明治期の『リア王』受容に関する論文の一部として『コルデリア姫』を取り上げ、先に見た「コルデリアの意気」の箇所を引用し、本作品が「女子教育の視点から選択されているこ

とは明らかである」と論じるが、具体的な説明はない。内丸公平は、明治期から昭和初期までの英語教科書等の中で、コルデリアがいかに女子教育の教材として利用されたかを考察する論文の中で、土谷と同様に「コルデリアの意気」に着目し、ト書きの例などを挙げるが、具体的説明はない。土谷も内丸も、女子教育という観点から本作品に注目したことは評価できるが、両者共にテキストの詳細な分析は行っておらず、時代背景についての説明もない。

本稿は、『コルデリア姫』においてコルデリアがいかに描かれているかを検証し、本作品に宮田の女子教育論がいかに反映されているかを考察することを目的とする。具体的にはまず、明治期の女子教育の背景と女学生の反骨精神について論じ、世間から何かと批判を浴びせられた女学生たちが、批判にめげず独自の文化を築いたことを指摘する。次に、『コルデリア姫』におけるコルデリア像に焦点を当て、同時代の『リア王』の翻訳を参照しながら、その特異性を検証する。最後に、「コルデリアの意気」について、『良妻賢母論』などで論じられた宮田の女子教育論を基に探究する。

一 明治期の女子教育と女学生の反骨精神

「女学生」とは、明治期から昭和初期まで存在していた「高等女学校」に通う一二歳から一七歳くらいまでの少女を指し、

およそ現代の女子中高校生に当たると。江戸時代までの日本では、男女の役割は別であり、女性は家事・育児に従事すれば良く、学問をすると縁遠くなると考えられていた。教育と言えば、「三従四徳」といった儒教思想に基づく『女大学』などの「女訓書」が、寺子屋などで教材として使われた（松田 二二六―二二七）。「女訓書」は、中村桃子曰く「女性のためのマナー本」で、「鎌倉時代から江戸時代、明治・大正時代まで広く普及し」、「結婚する娘や孫に儒教思想に基づいた女性としての振る舞いや人付き合いを示す書き物で、もとは中国からはいつてきたもの」である（三二）。

明治維新後、福沢諭吉や植木枝盛などが男女平等や女子教育の必要性を主張したが、依然として儒教的な男尊女卑思想が主流をなしていた（岡 五九―六〇）。一八七二（明治五）年に「学制」が布告され、全国に尋常小学校が設置されると、男女身分に関係なく教育を受けられるようになったが、女子に学問は不要であるとか、家事労働の担い手がいなくなると困るなどの理由から、女子の就学率は低かった（斎藤 一三九）。文部科学省によると、一八八二（明治一五）年の時点では、男子の小学校就学率が六七パーセントに対し、女子は三三パーセントであった。その後、一八九七（明治三〇）年になり、初めて女子の就学率が五〇パーセントを越えた（四 小学校の普及と就学率）。高等女学校に関しては、設置されたばかりの頃は、華族など家柄が良く裕福な家の娘しか通えなかったが、女子の小学校就学

率が上昇するにつれ、女学校の就学率も増加した。特に、一八九九（明治三二）年に「高等女学校令」が施行され、全国の府県に高等女学校が設置されると、その数は急激に増加した。事実、一八八二（明治一五）年には全国の女学校数はたった五校で、生徒数は二八六名であったが、一八九九（明治三二）年には三七校、八八五七名とそれぞれ増え、その翌年は五二校、一八九四名へと急増し、生徒数は一万人を超え、さらにその翌年は七〇校、一七五〇四名へと増えた（兼重 八四）。

こうした動きと並行し、女性の啓蒙を目的とする雑誌が作られるようになった。その先駆となったのが、日本最初の女性向け雑誌、『女学雑誌』であり、キリスト教思想に基づく啓蒙雑誌だった。「女学」とは「女性の地位を向上させ、権利を伸長し、女性を幸福にする学問」を指した（香川「女学生のイメージ」六八）。明治女学校の校長であった巖本善治が長いことその編集に携わり、島崎藤村、北村透谷、巖本の妻の若松賤子らが西洋文学の翻訳などを寄稿し、のちの『文学界』の母体となった。^四 巖本自身もシェイクスピアの翻案や評論などを多数執筆した。^五 読者の中には主婦や知的な層の男性などもあったようだが、主たる読者は女学生であった（佐竹 六〇）。『コルデリア姫』が掲載された『女学世界』は、一九〇一（明治三四）年に創刊された大衆的な月刊誌で、読者対象は女学生だったが、主婦層にも人気が高く、売れ行きは好調だった。大衆的とは雖も、女性の教養を高めることを目指しており、ドイル、トルストイ、

モーパッサンなど、西洋文学の翻訳も掲載された。

『女学世界』が創刊された明治末期には、女学生をヒロインとする小説が多く書かれるようになった。冒頭で触れた女学生小説『夜の鶯』の出版から一五年後、即ち、高等女学校令布告の四年後の一九〇三(明治三六)年二月に、小杉天外の『魔風恋風』という連載小説が『読売新聞』に掲載され、大反響を呼んだ(『女学生らいふ』)。海老茶袴に束髪(西洋風髪型)で自転車通学をする典型的な女学生と男子大学生との恋愛を主軸に、若い男女の風俗を描いた小説であった。他方、当時の現実の世では、女性が袴を穿いて自転車サドルにまたがるのは「はしたない」と思われ、新聞などのメディアに批判が殺到した。

香川由紀子は、「女学生の存在は、世間の新しい女性への期待を象徴する一方で、『慎みがない』、『墮落女学生』などといったマイナスのイメージとも背中合わせであった」と指摘するが、現実の世界では、女に学問は不要というような儒教的男尊女卑思想が横行していたため、「マイナスのイメージ」の方が主流であり、後述する通り、女学生の服装、髪型、言葉遣いに對する批判が多数あった。また、香川曰く、女学生を表す言葉は時代の流れによって変化した、「生意氣」と「お転婆」は継続的に使われ、「明治時代女学生を形容するのに最も多く使用され」た(『女学生のイメージ』五四)。香川によると、「生意氣」は「意氣がある」の意味で、「意氣」は「意氣地」を示す。「コルデリアの意氣」については後で論じるが、香川に従えばおそ

らく先の定義の三つ目、「意氣地」を指すのであろう。

このような女学生の「生意氣」で「お転婆」なイメージは、女学生の服装、髪型、言葉遣いといった風俗によりさらに助長され、批判されたと推察される。先に、「女訓書」が「三従四徳」に基づいていたことを指摘したが、「四徳」は女性を守るべき四つのこと、「婦徳」・「婦容」・「婦言」・「婦功」を意味した(任一八〇)。この中の「婦容」と「婦言」は、身だしなみや言葉遣いに関する規範であり、女学生たちはそうした規範から逸脱したために、批判を浴びせられることが多かったのである。

明治初期に女学校が設立された頃は、着物では動きづらく学業をする上で支障があるという理由から、男袴が制服として採用されたが、男袴を着用した女学生は「半男半女」と呼ばれたり、生意氣だなどの批判を多く受け、その五年後には禁止され、代わりに着物が採用された(中村 九九一〇〇)。その後、洋装、再び着物を経て、明治三〇年頃から海老茶色の女袴が定着した(本田 五二一六六、『女学生らいふ』)。

女学生のみがその批判的となった訳ではないが、束髪という西洋風の髪型も物議を醸した。明治時代になり、男性は「散髪脱刀令」に従い断髪をしたが、女性の断髪は許されず、江戸時代と同様の髪形をしていた(岡 五三二五四)。しかし、鬘を結うには時間とお金がかかり不経済だという理由や、鬘の油が不衛生であるという理由から、一八八五(明治一八)年に、日本髪を廃止し束髪を推奨する「婦人束髪会」が発足された。が、

他方では、伝統的な日本髪を支持する者もおり、束髪を巡りメデアで論争が生じた。西洋女性の政治運動や文化、風俗を紹介した『女性雑誌』は、「束髪図解」という様々な結い方の図を紹介し束髪を奨励した(香川「女学生のリボン」一九三一九四)。その甲斐あつてか、やがて束髪は女学生の間にも広まり、庇髪やリボンで結った髪型が大流行した。

女学生の間では「てよだわ言葉」や「書生言葉」など独特の言葉遣いも流行っていたが、こうした言葉遣いに対しては、男袴や束髪に対するよりもさらに激しい攻撃があった。「てよだわ言葉」とは「てよ」「だわ」で終わる女言葉のことである(中村一〇三)。「書生言葉」は今の大学生ぐらいの年齢の男子学生が使っていた言葉で、例えば、「僕」、「我輩」、「君」、「貴様」、「諸君」、「失敬」、「ぜ」や「給へ」で終わる言葉や、外国語などが挙げられる(中村八九)。先に触れた「四徳」の一つ「婦言」では、女性は丁寧な言葉遣いをして、口数は少ない方が良く規定され、この教えは「女訓書」を通して広められたが、中村は、女性の言葉遣いを統制することで男性が女性を支配しようとしたと指摘する(三三三―三四)。「てよだわ言葉」や「書生言葉」を使う女学生たちは、このような規範に背いたため、激しく非難された。例えば、『読売新聞』では、「てよだわ言葉」は将来の良妻賢母に相応しくない言葉として批判された(中村一〇四)。国語学者の大槻文彦は上野女学校での講話で、「今女学校で流行る『よくつてよ』などという言葉も聞きにくい」ため、

上品で慎ましやかに話すべきだと述べた(中村八〇)。巖本も『女学雑誌』の中で、女学生が「きた」「行く」のような丁寧でない言葉遣いに加え、「てよだわ言葉」や「書生言葉」を使うことを批判した(中村一〇六)。

また、興味深いことに、女学生たちは時にこれらの女言葉と男言葉を混ぜ、「あんな事を遊ばしてやがるんだとき」「おい、こう遊ばすんだよ」というように使っていた。中村はこうした言葉遣いをする女学生について、「気取った「遊ばせ」を乱暴に使って、『遊ばせ』に象徴される規範的言葉づかいに対する抵抗を示している」と解釈する(一〇七)。「抵抗」という表現は注目すべきで、中村は別の所でもこの言葉を使用しており、「女子学生は、『男女は等しく教育を受けるべき』であるが『女』には男とは異なる役割がある」という矛盾に対するささやかな抵抗としてこのような言葉づかいを始めたのではないだろうか」と論じる(二〇四)。つまり、中村に従えば、女学生たちは独特の言葉遣いを用いることで、男尊女卑思想を押し付けようとする社会に抵抗し、女学生というエリート女性の共同体の中で独自の文化を築き上げたのである。

「抵抗」は「束髪」の場合にも当てはまるだろう。女学生たちは学校教育や『女学雑誌』などの啓蒙により、西洋の男女同権主義や婦人参政権運動に励む女性たちの姿を知り、日本の封建主義的価値観を疑問視するようになったはずだ。それ故、世間から批判を受けても、西洋風の髪型を取り入れ、「てよだわ言

葉」や「書生言葉」を使い続けたのである。次節で論じるように、宮田のコーディーリアも「よだわ言葉」を用いているが、リアの非難を物ともせず自己の意志を貫く点など、女学生と共通する点が多い。おそらく宮田は実際の教え子たちをモデルにコーディーリアの人物像を形成したのであろう。

二 『コルデリア姫』のコーディーリア像

明治期の日本では、コーディーリアを「孝女」と見なすのが一般的な解釈であった。明治期に舞台化された『リア王』は、一九〇二（明治三五）年に京都南座で初演された高安月郊の翻案『闇と光』のみであるが、月郊は『闇と光』に就いて「の中で、多くの観客から受け入れ難いとされた蘭（コーディーリア）の死について語る際に、蘭を「孝女」と称す（川戸 一七七）。

『女学雑誌』に掲載された巖本の『三人の姫』についても、この解釈は当てはまる。この作品は、チャールズ・ラムとメアリー・ラムの『シェイクスピア物語 (Tales from Shakespeare)』（一八〇七（文化四）年）に依拠し、ラムではコーディーリアの心情に関する細かな説明があり、彼女の孝心が原作よりも強調されて描かれているが、『三人の姫』では「孝」という語の多用により、ラムよりもさらに強調されているように見える。宮下は、巖本の『理想佳人伝（第一章）シェイクスピア理想コルデリアの伝』、『三人の姫』、『両親に対する務め』という三つの翻案作

品について、「打算のないコーディーリアの孝養」は三作品全てに共通する「啓発な訓話」だと指摘するが、まさにその通りであり、コーディーリアの姿を通し、女学生の読者たちに親孝行の大切さを説いたのである（一〇）。

ところが、『コルデリア姫』のコーディーリアは孝女としては提示されておらず、むしろ自己の信念を貫くために、父の圧力に断固抵抗する娘として描かれる。この宮田のコーディーリアには大きく分けて三つの特徴がある。即ち、女学生言葉の使用、リアへの反発、泣かない点である。ここではこれら三点に着目し、コーディーリアがどのように描かれているか検証し、その特異性を考察する。その際に、比較のため適宜、『コルデリア姫』掲載の二年後に刊行された戸沢姑射と浅野和三郎共訳の『リア王』、及び掲載八年後に刊行された坪内逍遙訳『リア王』も参照する。^六

コーディーリアの女学生言葉は、冒頭の愛情テストの場で傍白として述べられる。リアはまずゴネリルに、自分をどれだけ愛しているか尋ねる、虚飾に満ちた甘言でリアを喜ばすゴネリルの姿を見たコーディーリアは、“What shall Cordelia speak? Love, and be silent” (I.1.62) と傍白の中で言う。次にリーガンが同じような台詞を述べた後には、“Then poor Cordelia! / And yet not so, since, I am sure, my loves / More ponderous than my tongue” (I.1.76.) と傍白の中で言う。便宜上、この二つでは最初の傍白を傍白一、次の傍白を傍白二と呼ぶこととする。宮田の翻

案では、傍白二は、「まああんなことが、よくまあ……コルデーリアはどう申上たらよからうか。愛し奉っては居る。がいやいや黙って居りましょう」(五〇四)。傍白二は、「マア何たる事、妾の申上る言葉はない。妾の心はとてども申上る事は出来ないのだけれど」(五〇五)となっている。

傍白一の「まああんなことが、よくまあ」と傍白二の「マア何たる事」は宮田の加筆で原文にはない。戸沢と逍遙もそのような加筆はしていない。これらの加筆には姉二人の発言、即ち虚言に対するコルデーリアの憤りが表されている。「まあ」「よくまあ」「マア何たる事」という「まあ」「こと」といった女言葉は、「てよだわ言葉」の類である。一九〇五(明治三八年、漫画雑誌『東京パック』に『荒馬物語』が連載されたが、このタイトルはヒロインの女学生が「アラマア」を口癖にしていたことに由来するが、「あらまあ」に似た「まあ」も女学生が使っていた言葉と考えられる(『女学生らいふ』)。同様に、前述の『魔風恋風』では女学生や若い女性がしばしば「まア」と言う。また、「こと」も明治期の女学生によって用いられた言葉であった(本田 八〇―八三)。

次に、コルデーリアの二つ目の特徴、リアへの反発に關し、二つの例を見てみよう。リアはコルデーリアに、どれだけ自分のことを愛しているかと尋ね、*Nothing* という返事に激怒する。その後、自分の氣に入る返事を得ようと何度も問い詰めるが、正直なコルデーリアは考えを変えない。リアが返

事を改めるよう言うて、コルデーリアは *“Why have my sisters husbands, if they say / They love you all? Haply, when I shall wed, / That lord whose hand must take my plight shall carry / Half my love with him, half my care and duty. / Sure I shall never marry like my sisters / To love my father all”* (1. 1. 99-104) と返答する。この箇所は宮田の翻案では以下の通りである。

あれ程姉君たちは何もかも打捨てて、あなたを愛するとおっしゃる程なら、何故御縁付きなされましたらう。若し妾も縁付きますような事が御座りますれば、連れそう郎君の出来るは当然、君が出来ますれば、其御方の為に私の半分は愛は注がねばならぬ事。是が妻の義務では御座りますまいか。して見れば父様ばかりを愛する事が出来ましょうか。(五〇六)

宮田の翻案は、最後の二行を除いては、戸沢・浅野訳と逍遙訳とはほぼ同じである。「是が妻の義務では御座りますまいか」は、宮田の加筆であるが、“half my care and duty”の誤訳かもしれない。「して見れば父様ばかりを愛する事が出来ましょうか」は原文の *“Sure I shall never marry like my sisters / To love my father all”* に対応するが、宮田の翻案では *“like my sisters”* が訳出されていないため、一般論のように聞こえる。実際、宮田は『良妻賢母論』の中で、良い妻になるには夫への愛情が大事だという

一般論を述べる際に、この箇所を引用している。宮田はこの引用について、結婚後、妻は「いくら子としてその親に尽すべき義務を感じて居ても、今までのように全然其の義務のために働か出す自由は、或る程度まで削減されるのである。少くとも其の配偶者と合意の上でなければ、この大義をも果たすべき苦のものではない」と述べ、コーデイリアの意見に賛同する（一九七）。

この箇所は原文では全て肯定文で、戸沢・浅野も逍遙も、肯定文として訳している。しかし、宮田は「御座りますまいか」「出来ましょうか」というように疑問文に書き換えている。このため、コーデイリアは自らの意見の正当性を強く主張し、リアに同意を迫るように聞こえる。このように宮田のコーデイリアは、父親に決して屈せず自分の意志を貫く反骨精神の強い女性として書き換えられている。

似たような例は、コーデイリアの「して見れば父様ばかりを愛する事が出来ましょうか」のすぐ後に続くやり取りにも見られる。

KING LEAR. But goes thy heart with this?

CORDELLA. Ay, good my lord.

KING LEAR. So young and so ununder?

CORDELLA. So young, my lord, and true. (1. 1. 105-08)

リア 夫りやそうもあろう。じゃがそちはほんとうにそう思うてか。

コーデイリア はア、

リア 左様な事を申すは今の若いものの癖じゃ、してそのもその若い為について云うのか、イヤまたころがやさしくない為か。

コーデイリア 父上、けれど是がほんとは思召しませんか。(五〇六)

この箇所の宮田の翻案には意識や加筆が各行にある。まず、リアの一つ目の台詞の「夫りやそうもあろう」の部分は宮田の加筆である。宮田のリアは、コーデイリアの考えに同意しているようであるが、『良妻賢母論』で示したように、宮田自身がこの考えに強く共鳴したために、加筆をしたのだろう。リアに対するコーデイリアの「はア」という返答はそっけないが、戸沢・浅野は「本心よりでムります」(九)、逍遙は「はい、本心でございます」(九)と丁寧な訳している。宮田のコーデイリアの返事はそっけなさすぎて、父を馬鹿にしているかのようである。

リアの「左様な事を申すは今の若いものの癖じゃ」は、完全な創作であり、聊か滑稽である。第一節で見たように、当時の女学生は何かにつけ批判を受けていたため、このような言葉を日常的に耳にしていたのではないか。リアが、コーデイリア

がそのような発言をするのは、若いからか優しくないからかと尋ねると、コーデイーリアは、リアの質問には答えず逆に質問をする。コーデイーリアは「けれど」という語で、リアの発言をきっぱり打ち消し、「思召しませんか」という否定疑問文を使うことで、自分の意見の正当性を認めさせようとする。疑問文という点では、先程の「御座りますまいか」、「出来ましようか」と同様であるが、「ません」という否定が入る分、より強く同意を求めているように感じられる。つまり、先程の発言よりも、さらに熱が込められ、コーデイーリアの毅然とした態度が強調されるのである。

コーデイーリアの特徴の三つ目、泣かない点は、リアに勘当されたコーデイーリアが宮廷を去る場で確認できる。原文には「with washed eyes」とあり、(11)でコーデイーリアは泣きながら台詞を述べる(こと)になっている。

The jewels of our father, with washed eyes

Cordelia leaves you, I know you what you are,

And like a sister am most loath to call

Your faults as they are named. Love well our father.

To your professed bosoms I commit him. . . . (1.1.270-74)

この箇所は宮田の翻案では非常に短縮され、「では姉君様達、これからもどうぞ御父様を御大事になされて下さりませ。ああ

あんなに御父様を、……すまぬ事でありました。然し云って返らぬ事さらば御暇申し上げます。……どうぞ御父様を御大事に……」(五一)となつている。

これに対し、戸沢・浅野訳では、「申し、父上様が御鐘愛の姉君達、此コルデリアは涙ながら、御暇を申し上げます。御両方の御心は存じた妾、乍去妹の分として、彼是と今申上げるにはしのびませぬ。只だ父君を何卒御大切に遊ばしませ。仰せられた通りの孝心深き御心に、御老体を御任せ申します」(二二)となつており、遣通訳では「父上御鐘愛のあなたがたへ、涙に浸る目でコオデリヤがお別れ申します。あなたがたの御氣質はよう知っていますけれど、妹の身としては、世間で謂うあなたがたの欠点を口にするに忍びません。父上に孝行をなされて下さい。口に出しておっしゃったあなたがたのお心に父上をお頼み申します」(二〇—二二)となつている。

このように、原文も、戸沢・浅野も、遣通も、「涙」に言及しているが、宮田は言及していない。省略記号の「……」によって、コーデイーリアが泣いていることが示されると解釈できるかもしれないが、宮田の作品には所々にト書きがあるため、もし泣いているならば、「泣く」などのト書きがあつたはずである。宮田の泣かないコーデイーリアは、反省はしているものの、もう取り返しはつかないとドライに割り切るように見え、これまでの場面と同様、ここでも彼女の精神的な強さが浮き彫りにされる。

対照的に、逍遙のコーデイーリアは泣き虫である。逍遙は、リアとコーデイーリアのやり取りの後半で、リアに「親に怒を起さすような汝、生れをらなんだがましじゃわい」(一八)と語らせるが、その直後に、「コオデリヤ泣伏している」というト書きを加筆している。このト書きは、原作にも、戸沢・浅野訳にも、宮田の翻案にもない。逍遙の解釈は誇張気味ではあるが、コーデイーリアは宮廷を去る際に泣くと捉えるのが通常の解釈で、巖本の『三人の姫』でもコーデイーリアが「涙にむせ」ぶ姿が描かれた(七三)。

さらに注目すべきことに、戸沢・浅野は“your professed bosoms”を「孝心深き御心」と訳し、逍遙は“Love well our father”を「父上に孝行をなされて下さい」と訳し、どちらもコーデイーリアのリアへの「孝」に言及する。ところが、宮田の翻案では「孝心」や「孝行」などの語はどこにも現れない。宮田が、結婚後は父と夫への愛情は半々になるというコーデイーリアの考えに共鳴していたことも考慮すると、宮田は親孝行にあまり関心がなかったと推測できる。また、『良妻賢母論』で、古来、親のために身売りされた娘が「孝女」や「節婦」と見なされてきたことを批判したり、結婚後、夫婦は親とは別居した方がよいなど述べることから、そのことは窺い知れる(一六、二五〇―五三)。

このように『コルデリア姫』におけるコーデイーリアとリア、ゴネリル、リーガンとのやり取りからコーデイーリアの三つの

特徴を分析した結果、宮田のコーデイーリアは一貫して、父親の圧力にもめげずに自己の信念を貫く不屈の精神を持った女性として表されていることが明らかになった。「はじめに」で触れた「コルデリアの意気」とは、このような態度を指すのではないか。言い換えれば、宮田は、成女の生徒たちにコーデイーリアの反骨精神を見做って欲しいと願っていたのではないか。次の最終節では、『良妻賢母論』などで論じられた宮田の女子教育論を参照しながら、「コルデリアの意気」とは何か解明したい。

三 「コルデリアの意気」と宮田脩の女子教育論

宮田の『良妻賢母論』は、良き妻や賢い母になるために、女性には家庭でどう振る舞うべきかを記した指南書である。宮田は、キュリー夫人や静御前といった実在の人物から、コーデイーリアや「ジュリアス・シーザー」のポーシヤ、『人形の家』のノラといった架空の人物まで、様々な例を挙げながら、理想的な妻及び母の像を詳述するが、特に宮田はこの中で、福澤の『新女大学』に倣い、『女大学』の儒教的な男尊女卑思想を徹底的に否定する。宮田の見解は、現代では古臭く聞こえるかもしれないが、当時としては進歩的な考えであり、女性には良き妻、賢い母になるために教育を受ける必要があり、妻は夫の装飾品・所有物・使用人ではないと主張したり、妻は夫に頼るばかりでなく、

夫のことも助けるべきだなど説き、妻の精神的自立を促した。

例えば、宮田は、精神的に強い女性の手本としてポーシヤを挙げ、第五章「良妻たる資質」の中で、良い妻の性質の一つとして、夫の秘密を守ることを指摘する際に、ブルータスの秘密を守ったポーシヤの例を紹介する。宮田曰く、男性と違って女性には理性よりも感情に左右されるため、秘密を口外したくなる性質があるが、「自尊心の強い勝気」のポーシヤは秘密を守った点で優れている。そして宮田は、古来、日本で夫が妻に秘密を打ち明けてこなかった原因は、秘密を口外するという女の弱さにあるが、それでは情けないと言い、妻は夫に隠すことはすべて把握し、普段から理性を修養し、弱い感情を抑制すべきだと提言する(一三七)。当時の日本では夫婦間の精神的交流がなかったようで、徳富蘆花も「日本婦人論」で似たような見解を示しており、妻の精神修養のため、夫婦共にシエイクスピアを読んだり、散歩するなど一緒に過ごす時間を多くし、妻は夫の相談役になるべきと提唱する(七)。

女性の精神力に対する宮田の考えは、第六章「母とは何か」にも見られる。宮田は、これまで日本で女性の人格が尊重されてこなかったのは、女性の心の弱さに原因があると述べ、女性の中で「弓折れ矢尽きた後でも、なお凜とした点があるなどと思われるような、剛こゝろ健気な気性のあるものは、まずまず稀である」と言う(三六九)。そして、「女子の優美は之を愛するに相応しくても、男性の壮美のように之を敬うには如何かと思わ

れる」と述べ、女性に尊重に値する性質がないことを嘆く(三七〇―七一)。

前節で見た通り、コーディーリアは父の怒りに屈することなく自らの考えを主張し、涙を流すことなく宮廷を立ち去るが、彼女はまさに「弓折れ矢尽きた後でも、なお凜とした点があるなどと思われるような、剛健気な気性のあるもの」であり、宮田の言う尊重に値する人格を持つ女性に当てはまる。つまり、精神的に強いコーディーリアは、宮田にとって理想的女性なのである。この精神的強さこそが、「コルデアアの意気」であり、「心ある婦人の心とすべき処」なのである。そして、作者が言う「意気」は、第二節でもほんの少し触れたが、やはり「意気地」の意味だろう。

女学生たちは、世間の人たちから生意気と思われ、何かと批判の対象になったが、彼女たちはそうした批判に屈することなく、自分たちの文化を守り抜いた。つまり、多かれ少なかれ、既に精神的な強さは備わっていたのだろう。宮田は、このような女学生たちの生意気さを、批判するよりもむしろ後押し、「コルデアア姫」の中でも「てよだわ言葉」を積極的に取り入れたのではないか。中村は女学生の独特な言葉遣いを、社会規範への「抵抗」と称したが、宮田はそのような「抵抗」を応援していたように思われる。

コーディーリアのリアに対する自由闊達な言動から、宮田の女学生たちが自由に伸び伸びとした教育を受けていたことが窺

われるが、事実、成女はかなり自由な校風の学校であった。一九一四（大正三）年刊行の『全国学校沿革史』によれば、成女では「教育制度は大抵高等女学校令に依りしが、繁簡宣しきに従い努めて自主自治の気風を養い質素の良習を尚びたり」とある。さらに同資料によれば、特に英語教育に力を注いでおり、英語を勉強するにはキリスト教の学校に入らないとならないが、それは一般家庭では好まれていないために、「本校は宗教的臭味を帯びずしてこの勃興せんとする進歩的女子教育に満足を与へむが為めに力を用いたるなり」とのことである（神辺 一三）。本資料が作成されたのは、宮田が校長を務めていた頃だが、この記述を読むと、宮田が儒教的な価値観に反対し、男女平等主義などの西洋の進歩的な考えに共鳴し、精神的に強い女性を理想としたことが納得できる。

また、「教育制度は大抵高等女学校令に依りしが」という点も興味深い。文部科学省によると、樺山文相は高等女学校令制定のための会議で、高等女学校は「賢母良妻タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ、故ニ優美高尚ノ気風、温良貞淑ノ資性ヲ涵養スルト俱ニ中人以上ノ生活ニ必須ナル学術技芸ヲ知得セシメンコトヲ要ス」と発言した。（「三 明治初期の女子教育」）。この「高等女学校令」の理念では、女学生は「賢母良妻」になるために「優美高尚」、「温良貞淑」といった気質や、中流以上の生活に必須な「学芸技術」の習得が求められたのである。先に指摘した通り、宮田は『良妻賢母論』の中で、「女子の優美」は愛でら

れるものだが、尊重されるものではないとし、「剛い健気な気性のあるもの」を理想的な女性としたが、これは国家の理想とする女性像とは真逆である。要するに、宮田は、「教育制度は大抵高等女学校令に依りしが、繁簡宣しきに従い努めて自主自治の気風を養い」と言うように、国家の教育理念に完全に従っていた訳ではなく、さらに『帝国教育』の中で、「我国の女子教育の方針の如きも思い切った革新を断行する必要がある。従来のように狭義の良妻賢母主義や、何と云っても男尊女卑的教育に満足して居るべきではない」と述べたように、女子教育の現況に不満を抱いていたのだ（「時代思潮」一四）。宮田は当時、市川源三、三輪田元道と共に、東都高等女学校長の権威とされ、『帝国教育』は全国の影響力のある教員が寄稿した雑誌であった。こうした雑誌で持論を唱えることで、宮田もコーデリアと同様、権威に対し不屈の精神で抵抗したのではないか。

おわりに

宮田は『コルデアア姫』において、父の圧力に断固として抵抗し、自らの信念を貫き通すコーデリアを理想的な女性として描き、これからの時代を生きる女学生たちの手本となることを願ったが、その背景には、男尊女卑思想が蔓延中、女学生に対する世間の風当たりが強かったという状況があった。宮田が、敢えてコーデリアに「てよだわ言葉」で語らせたの

は、女学生にとって身近な存在として提示することで、コーデリアの精神的な強さを、より簡単に理解し、見做ってもらうという教育的意図があったからだろう。家長制社会において、女学生たちは常に、コーデリアのような圧力を、父親や社会からかけられていたに違いなく、コーデリアとリアのやり取りを見て、コーデリアに共感や感情移入をする女学生も多かったのではないか。おそらく多くの女学生が、父親などの年長者から服従を強いられ、不本意ながらも自分の意見を曲げざるを得ないという経験をしたことがあったはずだ。特にリアの「左様な事を申すは今の若いものの癖じゃ」という宮田の加筆は、実生活で彼女たちがよく言われていた言葉と推測されるが、それに対するコーデリアの反撃、「父上、けれども是がほんとは思召しませんか」は、彼女たちには痛快に聞こえたかもしれない。

宮田が西洋文学に精通し、西洋文化を熟知していたことは、『良妻賢母論』に掲載された古今東西の偉人に関するエピソードから示唆される。宮田は西洋文化に明るかったために、男女平等主義や女子教育の重要性など、進歩的な考えを持っていたのであろう。宮田はしばしば『女大学』を批判したが、開国後、何一〇年の歳月を経ても、依然として封建主義的な価値観が横行する社会に対し、不満を抱いていたのである。高等女学校令が公布され、女子の中等教育機関への門戸が広がったものの、「優美高尚」や「温良貞淑」を求める良妻賢母主義教育が教

育理念の中心にあり、まさに宮田が言う通り、「就中女子教育は未だ何処かに『女大学』時代の古い習慣に囚はれて」いたのである（『時代思潮』一四）。宮田も良妻賢母主義者ではあったが、『良妻賢母論』で論じられたように、男女平等主義に基づき、女性の教育や自立を主張したため、国家とは見解を異にしていた。宮田は女子教育を改良すべく、様々な本や雑誌で自説を唱え、校長としても様々な会議で積極的に発言をしたようだが、コーデリアが自身の考えの正しさを信じ、不屈の精神で何度もリアに抵抗したように、宮田も自身の教育理念の正しさを信じて権威にしぶとく抵抗したに違いない。

引用文献

- Shakespeare, William. *King Lear*. Edited by R. A. Foakes, Thomas Nelson, 1997.
- Uchinaru, Kohei. "Teaching Shakespeare in Early Twentieth-Century Japan: A Study of *King Lear* in Locally Produced EFL School Readers." *Shakespeare Studies*, vol. 56, 2018, pp. 61-83.
- . "We that are young / Shall never see so much": Shakespeare's Cordelia as Material for Women's Education in Late Nineteenth- and Early Twentieth-Century Japan." *Tsindjinku Daigaku Gengobunka Kenkyujijoho*, vol. 34, 2019, pp. 15-27.

井上好人「明治・大正期における『良妻賢母』主義と高等女学校生徒の実践意識——校友会活動としての『演習会』の考察から」、『金沢星稜大学人間科学研究』第二二号、二〇一九年、二五—三四頁。

巖本善治「女子読本」、『女学雑誌』第一四五号、一八八九年、二—四頁。

『女子読本』、『女学雑誌』第一四七号、一八八九年、五頁。

『三人の姫』、『女学雑誌』第七三号、一八八七年、四九—五一頁。

『三人の姫』、『女学雑誌』第七四号、一八八七年、七三—七五頁。

『三人の姫』、『女学雑誌』第七五号、一八八七年、八九—九〇頁。

『三人の姫』、『女学雑誌』第七六号、一八八七年、一〇—一一頁。

『理想佳人伝（第一章）シェイクスピア理想コルデリアの伝』、『女学雑誌』第四八号、一八八七年、一五—三頁。

岡満男「婦人雑誌ジャーナリズムの軌跡（一）——男尊女卑の生活秩序をめぐって」、『評論・社会科学』第一五号、一九七九年、五二—七二頁。

岡田章子「『女学雑誌』におけるキリスト教改良主義と文学——『文学場』の形成におけるその意義」、『社会学評論』第六〇号、二〇〇九年、二四—二五八頁。

小原國芳「道徳教授革新論・学校劇論・理想の学校」、玉川大学出版部、一九八〇年。

香川由紀子「女学生のイメージ——表現する言葉の移り変わり」、『言葉と文化』第六号、二〇〇五年、五三—七〇頁。

『女学生のリボン——服飾に見る近代女性モラルの変容』、『東京女子大学紀要論集』第六〇号、二〇一〇年、二九—三〇三頁。

七頁。

兼重宗和「明治中期の女子教育について——とくに井上毅を中心として」、『徳山大学論叢』第一三三号、一九七九年、七五—九〇頁。

川戸道昭編「明治のシェイクスピア——明治のシェイクスピア（総集編）」大空社、二〇〇四年。

川戸道昭・榊原貴教編「シェイクスピア図絵——明治のシェイクスピア（総集編）」二、大空社、二〇〇四年。

神辺靖光「逸話と世評で綴る女子教育史（七四）」、『現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第七四号、二〇二一年、一〇—一三頁。

国立国会図書館「第一四八回常設展示『女学生らしい』」、二〇〇七年、navi.ndl.go.jp/kaleido/entry/jousetsu148.php。一〇—二二年一月五日アクセス。

齊藤泰雄「教育における男女間格差の解消——日本の経験」、『国立教育政策研究所紀要』第一四三三号、二〇一四年、一三七—四九頁。

佐竹久仁子「日本語のジェンダー規範形成をめぐって——『女学雑誌』の言説（一）」、『ことば』第二二号、二〇〇二年、五九—七〇頁。

土谷桃子「明治期シェイクスピア『リア王（King Lear）』の受容」、『岐阜大学国語国文学』第三三三卷、二〇〇七年、二九—四五頁。

坪内逍遙訳『リア王』、早稲田大学出版部、一九二二年。

徳富蘆花「日本婦人論（第三）」、『国民之友』第三号、一八八七年、一—三頁。

戸沢姑射・浅野和三郎訳『沙翁全集第五卷 リア王』、大日本図書、一九〇六年。

中村桃子「女ことばと日本語」、岩波書店、二〇一二年。

- 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編
『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇—二〇〇二年。
任 夢溪「貝原益軒の女訓思想について」、『文化交渉』第三卷、
二〇一四年、一七三—一九〇頁。
『波乱の大文学会』、『花子とアン』、中園ミホ、第二五回、NHK、
二〇一四年。
本田和子『女学生の系譜・増補版——彩色される明治』、青弓社
ルネサンス、二〇一二年。
松田智子「近世における女子教育史についての一考察——江戸
時代末期の女子教育について」、『奈良学園大学紀要』第三号、
二〇一五年、一二五—三四頁。
宮下襄「巖本善治・女学雑誌とシェイクスピア」、『巖本』第三号、
一九九七年、三—二〇頁。
宮田脩『コルデリア姫』、『女学世界』第四卷第四号、一九〇四年、
五〇三—一頁。
『時代思潮と女子教育方針』、『帝国教育』第四四四号、一九一
九年、一一—一四頁。
『良妻賢母論』、日本図書センター、一九八四年。
文部科学省、「三 明治初期の女子教育」、『文部科学省』、www.
mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317595.htm。
二〇一二年一月三日アクセス。
『四 小学校の普及と就学率』、『文部科学省』、www.mext.go.jp/
b_menu/hakusho/html/others/detail/1317590.htm。二〇一二年
一月三日アクセス。

註

- 一 本稿で明治期の文献を引用する際、旧漢字は新漢字に改める。ルビに関しては、特殊な読み方の漢字や現代ではあまり用いられない漢字を除き、省略する。また、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに改める。
- 二 内丸公平によると、一八八六（明治一九）年から一九四六（昭和二一）年年までの間に使用された国産の検定英語教科書九三点の内、「リア王」の掲載回数は「テンベスト」と並び一七回で、『ベニスの商人』（六九回）の次に多い（三五）。「リア王」を掲載した教科書一七点の内、女学校用のものは一〇点と多^く（『Teaching Shakespeare』表一 八三）。
- 三 「リア王」が掲載された『女学雑誌』と『女学世界』の詳細は第一節で述べる。
- 四 『女学雑誌』と『文学界』の関係は岡田二四二—二五五を参照。
- 五 『女学雑誌』とシェイクスピアの関係については、宮下三—二〇を参照。
- 六 宮田がどの版の「リア王」を参照したかは不明であるため、原文からの引用にはR・A・フォークスの版を使用する。